小笠原隆元、河内賢隆両教授の勇退に寄せて
―― 思い出すままに ――

田　中　　保

平成十六年三月末日をもって小笠原隆元、河内賢隆両教授が定年を数年残して退職なされた。このことは一年前に第一群教室会議において、両先生がすでに意志表示をなさっていたことであるが、お二人の健康なお姿を見て、私は定年までもう少しお付き合い頂けるものと内心思い、余り深く受け止めていなかった。お二人は健康上以外のご都合がそれぞれあったようで、その意志固く退陣されたのである。外国語部教授会では、小笠原、河内両先生は私の席の向かい側にいつも隣同士で座られていたので、四月から目の前の二つの空席を見るにつけ、私は前歯が欠けたような気持ちでなんとなく違和感を覚え、「ああ、小笠原先生、河内先生、お辞めになったんだなあ」と認識している昨今である。残された者の方が去り行く者よりも喪神感は強いのではなかろうか。

小笠原先生とは、私が駒澤大学に奉職して以来早三十年以上のお付き合いになろうかと思われる。当初お会いした頃、先生はご自分のライフワークを英文学関係にするか、英学史関係にするか、或いは仏教英語研究にするか研究分野を模索されていたようである。先生は、『ウィリアム・サマーセット・モームの宗教的意識の展開――「人間の絆」』（金星堂、1981）を中島関爾教授追悼論文集、『文学と人間』に寄稿したり、日本英学史学会全国大会に出席されたりしていたが、先生の研究室に時折お邪魔する度に、ガラス戸付の書棚に語学会話テープが年々巻数を増やしているのに気付き、英語を通しての仏教英語研究をライフワークになさるのだなと推察していた。

先生の最終講義である特別講演『禅仏教の多様性』（平成十六年三月九日）で、仏教英語研究に研鑽されてきたこと、特に海外へ十数回も赴き日本の仏教

伝道師として重要な役割を遂行されてきたこと、駒澤大学仏教学部の学生をこれまでに幾人も仏教国際布教師として育成し、彼らが現在海外で活躍されていることなどのお話を伺い、大変感銘を受けるとともに私の想像以上の研究活動を先生がなされてきたことに感服した。

河内先生とは、先生が文学部英米文学科の助手をなさってから、外国語部専任講師として赴任されてきた以来の、小笠原先生よりも数年遅いお付き合いになるかと思う。

先生はシェイクスピア作品を中心にエリザベス朝の言語研究に関心をもたれていたようであったが、他に分野を翻訳にも広げられていた。『ビルマ―タイ鉄道建設捕虜収容所――医療将校ロバート・ハーディ博士の日誌――　1942～45共訳』（而立書房、1993）の翻訳によって、日本翻訳家協会から、日本翻訳文化賞を受賞されたことはまことに喜ばしいことであった。平成六年一月二十六日に市ケ谷の私学会館において、先生の受賞を祝う会に外国語部の同僚たちは勿論のこと他学部の先生方、非常勤の先生方も参加されて大勢で先生を囲んで祝いの楽しいひとときを過ごさせていただいたのを昨日のように思い出される。

小笠原先生は、松本市の山里にある龍雲山廣澤寺現住三十世住職でもあるので、今後も、時折海外へ赴いて英語での仏教伝道をなされんことを切に願っている。

河内先生は、四月より外国語部（英語）所属の非常勤講師として週一日だけ出講されることになったので、またお会いし先生の研究分野である言語や仏教に関するお話を伺える機会があろうかと楽しみにしている。

小笠原先生、河内先生、永い間本当にご苦労様でした。でも、これからも健康に留意され先の人生を謳歌されんことを願っています。